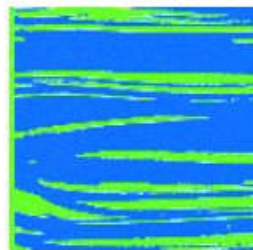


日本行動分析学会ニューズレター

J-ABAニューズ



2013年 春号 No. 70 (2013年6月3日発行)

発行 日本行動分析学会 理事長 園山繁樹
〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1 リファレンス内
FAX : 06-6910-0090 (日本行動分析学会事務局と明記) URL : <http://www.j-aba.jp/>
E-mail : j-aba.office@j-aba.jp

日本行動分析学会第31回年次大会のご案内……………第31回年次大会準備委員長 平澤 紀子
日本行動分析学会創立三十年記念事業について……………実行委員長 清水 直治
日本行動分析学会創立三十年記念事業
「熊野集会～生活と行動分析学～」を開催しました……………奥田 健次
熊野集会でのご縁：熊野集会事務局より……………笹田 夕美子
熊野大会に参加して……………中村 徳子
日本行動分析学会創立三十年記念事業
「熊野集会」～生活と行動分析学～ に参加して……………長谷川 福子
認知症研修会報告「高めよう！認知症の生活スキル」
行動リハビリテーションを活用する」2013年2月9日(土)……………田代 大貴
連載：いま、こんな研究会しています(6)「第一回高知言語教育ABA研究会を開催して」…森下 浩充
自著を語る：『DVDで学ぶ応用行動分析学入門』……………有川 宏幸・渡部 匡隆
連載：海外で学ぶ学生、海外で働く専門職(10)
「ABAセラピーのプログラムスーパーバイザーという仕事」……………小山 高慶
連載：jABAシアター：映画「クラッシュ」と映画「危険なメソッド」：現代人の欲望の行方…伊藤 正人
編集後記……………ニューズレター編集部

日本行動分析学会第31回年次大会のご案内

日本行動分析学会第31回年次大会準備委員会 委員長 平澤紀子

日本行動分析学会第31回年次大会につきまして、
ご案内をさせていただきます。

4月5日(金)に大会予約参加申込みを締め切りま
した。予約参加申込み193件、ポスター発表100件、

自主企画シンポジウム3件でした。例年より早い時期にもかかわらず、多くのお申込をいただき、誠にありがとうございました。おかげで、大変充実した大会になりました。あらためて感謝申し上げます。

大会プログラムについて内容をご紹介します。学会企画シンポジウムでは、「健康行動への行動経済学からのアプローチ」を行います。2000年に刊行されたビッケルとヴチニッチの編集になる本（Reframing health behavior change with behavioral economics, LEA）の13年後の現況を基礎の若手にレビューしてもらい、これに基礎と応用（臨床）の若手を指定討論者として、議論し、本邦ではあまり行われていない行動経済学的接近法を広く知ってもらうことを目指すものです。

特別講演として、日本行動分析学会理事長の園山繁樹先生により、「行動障害とABA—過去・現在・未来—」をお話いただきます。先生は、長年、自閉症や行動障害という対応の難しい方やそのご家族の豊かな生活を実現するための研究をされております。機能分析を中心に、行動分析学の基礎と応用を統合し、大きな変化をとげてきた本領域の研究から、今後我々がなすべき研究や実践へのご示唆いただけるはずです。

大会企画として、行動分析学による特別支援教育の推進にかかわるシンポジウムと公開講座を行います。

大会企画シンポジウム「インクルーシブ教育の構築に向けた行動分析学の貢献と課題」では、国の教育行政に長年携わってこられた石塚謙二先生の基調報告を踏まえて、研究や実践の立場から、わが国のインクルーシブ教育に、行動分析学がどう貢献しているか、いけるか、いくべきかを検討します。公開講座では、Positive Behavior Supportをテーマに、藤原義博先生から、特別支援学校における児童生徒の主体的な参加を促す授業づくり、小笠原恵先生から児童生徒の参加を促す行動問題へのアプローチについて、分かりやすく解説していただきます。学校心理士会ポイントがつきます。

研究発表、自主企画シンポジウムの皆様には、5月31日（金）までの抄録原稿・著作権確認書・研究倫理誓約書の提出および諸費用納付をお願いしております。また、当日参加の皆様には、会場でお会いできますことを楽しみにしております。なお、宿泊案内とオプションツアーは5月31日（金）までお申込ができます。

前日に名古屋で開催されます日本行動分析学会創立三十年記念式典・記念シンポジウムに引き続き、多くの皆様のご参加を、心よりお待ち申し上げます。

日本行動分析学会創立三十年記念事業について

実行委員長 清水直治（東洋大学）

日本行動分析学会は、1979年に行動分析研究会として出発しました。そして1983年には日本行動分析学会として創立され、第1回年次大会を開催しています。その後、1987年には日本学術会議に学術研究団体として登録されました。このたび、日本行動分析学会創立三十年を迎えるに当たって、2012年2月に日本行動分析学会創立三十年記念事業実行委員会（山口薫名誉実行委員長、清水直治実行委員長）が組織され、各担当の委員会のもとに記念事業を企画・実施

しています。記念事業のうち「熊野集会」はすでに終了いたしました。その他の記念事業を、以下のように実施いたします。

【記念式典・記念シンポジウム】

- ・ 日時：2013年7月26日（金）13:00～19:00
- ・ 会場：テレビアホール（名古屋市東区・東海放送会館）(TEL052-954-1165)

13:00～13:30 記念式典

（日本行動分析学会の三十年の歩みを振り返る

とともに、功労者表彰を行います)

14:00～19:00 記念シンポジウム

「開かれた行動分析学に向けて：シングルケースデザインをめぐる」

企画：シンポジウム・特集号委員会（委員長：井垣竹晴、委員：井澤信三、石井拓、長谷川芳典、藤健一、真邊一近、吉岡昌子）

司会：井垣竹晴（東京女学館大学）

話題提供：石井拓（徳山大学）「シングルケースデザインの概要」

吉岡昌子（愛知大学）他「実践場面におけるシングルケースデザインの活用」

山田剛史（岡山大学）「シングルケースデザインにおける統計的分析」

田垣正普（大阪府立大学）「シングルケースデザインの質的研究」

指定討論者：藤健一（立命館大学）、吉田寿夫（関西学院大学）

（2014年度に、日本行動分析学会創立三十年記念特集号（学会機関誌）を発行予定です。そのなかに記念シンポジウムの記録論文、回顧記録論文等を掲載いたします。また、シングルケースデザインに関する図書の企画・出版も予定しています）

【記念出版】

次の、倫理に関する図書の翻訳について、2013年8月末に二瓶社より公刊予定です。

『いま、そこにある倫理：基礎から考える行動分析学的な倫理』（仮）（Jon Bailey & Mary Burch(2011). *Ethics for Behavior Analysis* 2nd ed. New York: Routledge.）

翻訳者：森山哲美、中野良顯、大石幸二、吉野俊彦、鎌倉やよい

（記念出版委員会委員長：武藤崇、委員：青山謙二郎、森山哲美）

【記念グッズ製作】

「T シャツ」、「タンブラー500ml」、「USB メモリー」、「ワイングラス」について、日本行動

分析学会ロゴ入り記念グッズの製作・販売を行います。これらの記念グッズは、2013年度年次大会（岐阜大会）の会期中に会場で販売いたします。なお、ワイングラスは懇親会参加者に配布いたします。

（記念グッズ委員会 委員長：杉山尚子、副委員長：大久保賢一、委員：大月友、熊仁美）

【記念学術集会「熊野集会」】

この記念事業については、以下のようにすでに終了しています。詳細は本号の「熊野集会」報告をご覧ください。「生活と行動分析学」というテーマで、新宮市民を対象に市民公開講座を行いました。最終日には、「佐藤春夫記念館」を見学するとともに、新宮市内を散策しました。

・日時：2013年3月9日（土）～11日（日）2泊3日（宿泊形式）

・宿泊・総括会場：新宮ユアアイホテル（和歌山・新宮市Tel0735-22-6611）

3月10日（日）9:00～18:10 ワークショップ

・会場：新宮地域職業訓練センター（Tel0735-22-0005）

・内容：ワークショップ5テーマについて行われました。（「高齢者と共に生きる－ダイバーショナルセラピー」企画座長：長谷川芳典（岡山大学）、「地域と共に生きる（1）地域通貨－」企画座長：浅野俊夫（愛知大学）、「障害者と共に生きる－支援者として、応用行動分析家として、そしてきょうだいとして」企画・座長：園山繁樹（筑波大学）、「地域と共に生きる（2）ゴミを出さずにゴミ問題を解決する－」企画：奥田健次（行動コーチングアカデミー）・座長：島宗理（法政大学）、「動物と共に生きる－野生動物と共に・ペットと共に・実験動物と共に－」企画座長：真邊一近（日本大学）、

3月11日（月）9:30～11:00 総括－新しい10年に向けて－

司会：奥田健次（行動コーチングアカデミー）

・会場：新宮ユアアイホテル

11:00～15:00 佐藤春夫記念館・熊野速玉大社他
市内観光

(熊野集会委員会 委員長：奥田健次、委員：杉
山尚子、笹田夕美子)

日本行動分析学会創立三十年記念事業「熊野集会～生活 と行動分析学～」を開催しました

奥田健次 (行動コーチングアカデミー)

日本行動分析学会創立三十年記念事業の一つとして、熊野集会(和歌山県新宮市)が盛会裡に終わりました。私は本記念事業の準備委員として関わってきたのですが、その後、実行委員会から熊野集会委員会の委員長を任せられました。不慣れな役割でしたが、ご経験豊富な諸先生や委員会スタッフの仲間に恵まれ、また現地の方々のご支援とご協力をいただき、2泊3日の合宿形式(2013年3月9日～3月11日:於・新宮ユーアイホテル、新宮地域職業訓練センター)による学術集会を無事に終えることができましたことを、深く感謝申し上げます。参加者は、市民も含めて70名を越えました。

初日にはプレイベントとして、「台風12号紀伊半島大水害から防災・減災を学ぶ」というテーマで、講師として品田顕二郎氏(前熊野川舟下りセンター長)と榎本義清氏(和歌山災害救助犬協会理事長)からご講演を賜りました。

メインイベントとなる二日目には、園山繁樹理事長からのご挨拶の後、田岡実千年新宮市長からご挨拶をいただき、「新宮市と日本行動分析学会の縁」について杉山尚子常任理事からご発表いただいて、学術集会の幕が開きました。

学術集会では、次の5つのテーマについて専門家や当事者からの話題提供を受け、参加者で時間の許す限り討論をいたしました。市民にも公開していましたので、地域の方々によるご質

問やご意見を賜ることもできました。5つのテーマは、「高齢者と共に生きる～ダイバーショナルセラピー～」 「地域と共に生きる(1)～地域通貨～」 「障害者と共に生きる～支援者として、応用行動分析家として、そしてきょうだいとして～」 「地域と共に生きる(2)～ゴミを出さずにゴミ問題を解決する～」 「動物と共に生きる」というものでした。いずれのテーマも、私たちの日常生活上において身近な行動に関わりのあるものばかりです。私たちは学会内においては、それぞれの専門分野、興味関心について研究を行うものですが、専門分野外の問題についてじっくりと考える機会はそれほど多くはありません。こうした合宿形式での学術集会ならではのイベントであったと言えるでしょう。夜は懇親会と、その後には酒とおつまみで時間の許す限り、若手会員から中堅・ベテラン会員までが「大学院生の頃に戻ったような時間」を過ごすこともできました。

最終日には、「総括～あたらしい10年に向けて～」では、一般市民に公開されていませんでしたので、本学会の会員が遠慮なく行動分析学の理論や哲学、技術、社会への貢献、課題などを、ざっくばらんに討論することができました。メインイベントの5つのワークショップで明らかにされた社会的な課題について、今後、行動分析学の適用範囲を広げていく契機となれ

ばと思います。その後、オブショナルツアーとして有志が新宮市「かわみ」で懐石ランチをいただき、地元名物「めはり寿司」などをいただきながら故・佐藤方哉第2代会長の思い出話を聞くこともできました。さらに、この熊野集會に合わせて佐藤春夫記念館が開催して下さった企画展『方哉は日本一のせがれなり』-佐藤春夫と心理学者の息子・方哉-にも有志で見学に行きました。これらの様子は、地元新聞各紙

の一面で紹介されるなど、熊野地方での市民からの注目は大きかったようです。

私個人としては、正直「思いつき」で着手した学術集會だったのですが、すべてのテーマやイベントについて関わって下さった学会員らによって、あくまでも行動分析学でどう考えるか、何ができるか、真摯に考えて下さったおかげで、改めて行動分析学による社会貢献の可能性を見たような実感をしております。

熊野集會でのご縁～熊野集會事務局より～

笹田夕美子（浜松市発達医療総合福祉センター）

「熊野集會」について私をはじめに耳にしたのは、2012年5月シアトルでのABAIの会場でした。学会の合間をぬって奥田健次先生と杉山尚子先生が熱心に打合せをなさっていた脇にしながら、私は初のポスター発表直前の緊張で、先生方のお話も異国のことばのように聞いていました。打合せ後、奥田先生は早速、会場近くのスターバックスで企画をねりはじめ、「高齢者ととともに」「地域とともに」「障害者ととともに」「動物とともに」「ゴミ問題」という5つのテーマを5分ほどで案出されました。私は…といえば、緊張の果てに買ったばかりのコーヒーを落として床にぶちまけ、店員さんに「二度とこぼすなよ」と言われながらももう一杯コーヒーをサービスしてもらう有様…このように私は自他ともに認めるうっかり者です。学会員としても新参者であり、まさか数ヶ月後に熊野集會の事務局を仰せつかるとは夢にも思っていませんでしたが、熊野集會委員長の奥田先生のもとで臨床の修行をさせていただいているご縁で、今回のお役目を努めさせていただくことになりました。

あらためて、熊野集會は行動分析学会創立三

十年記念事業の一つで、学会員が、寝食をともにしながら時間を気にせず議論を尽くし、交流を図ることを目的とした宿泊型の学術集會であるとうかがいました。熊野は、佐藤方哉先生のゆかりの地であることに加え、学会のメーリングリストでの熊除けの議論から熊の行動…熊野古道…という奥田先生の言葉遊びも開催地発案・決定の一役を担ったとお聞きしております。

5つのワークショップは、テーマに精通した先生方に座長をお願いして、コーディネートしていただくという方針でした。「高齢者」については長谷川芳典先生、「地域」については浅野俊夫先生、「障害者」については園山繁樹先生、「動物」については眞邊一近先生、「ゴミ問題」については企画を奥田先生、座長を島宗理先生がお引き受けくださり、魅力的な舞台が整いました。さらに各先生が学会内外から選りすぐりの話題提供者を招聘してくださり、年の瀬の紅白歌合戦のような華やぎを感じながらチラシを作成いたしました。内容の詳細は、他の先生方のご報告に委ね、私は、今回、熊野集會の裏方で、多くの方のお世話になったことと、そこで垣間見させていただいたご縁についてお伝えした

いと思います。

今回、開催地から離れた事務局で準備を進めることができたのは、ひとえに新宮市の方々の多大なご協力あってのことでした。特に新宮市役所OBで、熊野三山協議会幹事の山本殖生様にはご多忙の日々をぬって、宿泊地、会場の手配、広報、佐藤春夫記念館や市役所との連絡、オプションツアーに至るまでご尽力いただきました。杉山尚子先生と私で事前下見にうかがった際にも、新宮市内を巡ると、大げさでなく数歩歩くと山本様の知人に出会う状況で、山本様にご手配いただいた各所で丁寧を迎えていただきました。

熊野集会のチラシができるのと佐藤春夫記念館の辻本雄一館長からは、早速、記念館関係者10名の参加お申込みをいただきました。さらに記念館では、熊野集会の広報を積極的に行ってくださいました。下見の際、記念館では企画展『方哉は日本一のせがれなり』が始まっていたこともあり、杉山尚子先生の来館に地元新聞社2社の取材が入り、熊野集会開催もあわせて新聞記事に掲載していただきました。オプションツアーでの懐石ランチ「かわゐ」の女将は、佐藤方哉先生が女将の新宮弁をきいて「親父とまったく同じ言葉。ああ、ふるさとに帰ってきたなあと感じる」とニコニコ話しておられた思い出を涙ながらに語っておられました。そして、新宮市の田岡実千年市長は、下見の際も、熊野集会当日も、公務ご多忙の中、お時間を捻出してご来場くださいました。下見前まで、私は、わけもわからぬまま、ただ目の前の準備に追われておりましたが、新宮市でお会いした方々が新宮市の名誉市民佐藤春夫氏と佐藤方哉先生お二人の功績を、共にとても大事にされる姿にふれて、この事業が新宮の地で行われることの意義と重みを遅ればせながら実感した次第です。

熊野集会の開催時期は、年度末、入試など、

条件的には厳しい時期でしたが学会の理事の先生方にも多数ご参加いただき、学生会員や非学生会員の参加者も含み、活発に議論を深めていただくことができました。また、ワークショップ当日に会場で展示した上で新宮市に寄贈する目的で、学生会員の先生方にご著書の寄贈を募ったところ、「当日参加できないけれど著書を寄贈したい」というお申し出もいただきました。熊野集会の準備中には、他にもこの事業に寄せる思いや、ご縁を感じる出来事があり、その都度、何かに背中を押されるように準備が進んできた気がしています。冒頭に申し上げた通り、私は不慣れなうえに、かなりのうっかり者で、最終日のオプションツアーでも「かわゐ」の代金を払い忘れ、あわてて戻るという始末…あわや集団無銭飲食のほうで新聞一面掲載か!?!というオプションまでつけてしまいました。準備中も学会事務局や記念事業実行委員会、奥田先生、杉山先生はじめ皆様に多々ご心配をおかけしました。それにもかかわらず、最後まで事務局を努めさせていただいたおかげで、学会の三十年を支えてきたものを、別の角度から学ばせていただくことができたいへん感謝しております。少しでもご恩返しができるように今回の経験と熊野集会総括で持ち帰ってきた今後の課題を自分なりに咀嚼してゆきたいと思います。

※ なお、熊野集会で下記の先生にご著書の寄贈をいただきました。あらためて御礼申し上げます。

(浅野俊夫先生、大河内浩人先生、奥田健次先生、小野浩一先生、佐伯大輔先生、島宗理先生、杉山尚子先生、園山繁樹先生、中島定彦先生、三田地真実先生) ※五十音順

熊野大会に参加して

中村徳子（昭和女子大学）

2013年3月9日～11日に和歌山県新宮市で開催された日本行動分析学会創立三十年記念事業の熊野集会「生活と行動分析学」に参加させていただきました。佐藤方哉先生ゆかりの地である新宮市で、3日間の合宿形式で開催された集会は、参加者全員が寝食をともにしながら同じプログラムに参加できるといった大変魅力的な企画でした。

以前から一度訪れたいと思っていた熊野は学生時代から大阪に住んでいながらも何となく遠いという印象があったので、なかなか訪れる機会がありませんでした。そして、このたび東京から向かうにあたって、やはり熊野は非常に遠かったのだという事実を改めて実感しました。まず9日の夕方に予定されていたプレイベントに参加するために、12時58分名古屋発のワイドビュー南紀5号にのるつもりが乗り遅れてしまい・・・次のワイドビュー南紀7号はなんと7時間後。新宮にたどりついたのは夜の11時すぎで、残念ながら「台風12号紀伊半島大水害から防災・減災を学ぶ」は拝聴できませんでした。

翌日10日は朝から夕方までは5つのテーマについてのワークショップがありました。オーストラリアの高齢者施設での介護実践例を日本に採り入れようと試みられているダイバーショナルセラピーのお話。シャッター商店街活性化のためにエコマネーを活用する試み。障害者をきょうだいにお持ちの応用行動分析家が施設で実践する支援について。世界トップレベルのゴミ分別によって、ゴミを出さずにゴミ問題を解決している徳島県上勝町の実践報告。野生動物、ペット、そして実験動物と応用行動分析の関係・・・と、この5つのテーマをみるだけでも、

応用行動分析という学問がわれわれの生活そのものと非常に密接に関わっているということがわかります。

どのテーマも興味深かったのですが、今回は紙面の都合上、最初のテーマだったダイバーショナルセラピーについてのお話について少し触れたいと思います。まず印象的だったのは「琴を弾く人と壁を叩く人」というスライドでした。高齢者施設で、何もすることがなく壁を叩きながら時間を過ごすのか、あるいは趣味の琴を弾きながら時間を過ごすのか、それは職員の力量に委ねられているのが日本の現状だそうです。高齢者がレジャーやレクリエーション活動を選択する機会を得ることで、個々人のQOLが高まり死を迎えるまで人生を愉しむことができる。その手助けをするのがダイバーショナルセラピストで、オーストラリアでは専門職としても認められているそうです。

このお話を聞いて、知的で俳句を詠むのが好きだった祖母が生前デイケアで幼稚園児のように手遊びを強いられている(?)姿を垣間見て胸が痛んだことを思い出しました。実際、毎日立送迎車に乗って出かけていくので楽しんでいるとばかり思っていたのですが、訪問介護の方に「べつに行きたくないけど家族が疲れるからね・・・」と漏らしていて、介護に疲れた母を休ませるためだけにデイケアに通っていたことが判りました。

さっそく、身体が不自由な祖母でも、もっと自発的に取り組めることで時間を過ごさせたいと、「天声人語」を写したり計算ドリルをさせてもらうよう（いろいろ障壁はあったのですが）施設に頼み込んだのでした。今後の日本でも、さまざまな施設において、高齢者の自己実現や

尊厳、生きがい担保されていかなければなりません。そのためにも、個人個人が愉しめることを自ら選択できる機会が増え、またそれらを支援できる専門的知識をもった職員が一人でも増える必要があることを改めて感じました。

今回の魅力のひとつは、多くの学会でありがちな裏番組に参加することができないというジレンマに悩まないですんだことでした。参加者全員が同じテーマについての発表を聞き、考え、そしてディスカッションすることで、いま課題となっているものは何なのか、その解決する糸口は何なのかといったことを全員で共有しながら理解を深めることができたと思います。また行動分析家以外の全く違う業界の方々が話題提供をしてくださり、それに対して行動分析家が指定討論者として切り込むという掛け合いも大変面白く、これも応用行動分析が生活における行動そのものを研究対象としているからこそ可能となった企画だと思いました。

ところで学会での楽しみのひとつでもある懇親会では大変おいしい地酒を頂戴しました。買い物と美味しい日本酒が好き(?)な私は、すでに同じ銘柄の日本酒を入手していたのですが、味がわからなかったので小さいサイズを購入。

こっそり部屋で味見して美味しかったら大きいサイズを購入しようと目論んでいたのですが、その必要はなくなりました。また参加者全員が同じ宿に泊まることで可能となった二次会は深夜まで続けました。畳の部屋で膝を交えての語り合いは、まるで学生時代に戻ったようで本当に楽しい時間を過ごすことができました。翌日は前日のワークショップを踏まえての討論会。こちらも奥田先生の司会のもと、大変楽しくてあつという間に時間が過ぎてしまいました。

お楽しみの最後を飾った懐石ランチと佐藤春夫記念館ツアーには残念ながら参加できませんでしたが、駆け足で熊野速玉神社や神倉神社(の入り口)を参拝し、佐藤春夫記念館の外観を拝み、そして杉山尚子先生一押し「鈴焼」をもちろん大量購入してからワイドビュー南紀6号に飛び乗ったのでした。今回は佐藤春夫記念館のなかを見学させていただくために、そして熊野古道を歩くために再訪すると強く心に決めた最終日でした。今回このような貴重な体験をさせて頂きましたこと、参加者の皆様および企画してくださった先生方に心より感謝いたします。ありがとうございました。

日本行動分析学会創立三十年記念事業「熊野集会」

～生活と行動分析学～ に参加して

長谷川福子 (常磐大学)

この度、熊野集会に参加した感想を、以下に述べさせていただきます。

私が、熊野集会に参加した理由は、「熊の行動を調べるため…」ではなく、次の3つでした。一つは、地域社会が抱える問題に対して革新的な取り組みをしておられる地域の方々の基本的

な考えを知り、どの部分が行動分析学の考え方で共通するのかを明らかにしたいと思ったためです。二つ目の理由は、行動分析学の視点と方法を、実際の地域社会の問題に応用した例を知り、行動分析学の有効性を再確認するためでした。三つ目の理由は、行動分析学を学ぶ人たち

と熊野という地域で同志の絆を深めるためでした。この感想文では、集会で行われた5つのワークショップを紹介し、それについての感想を述べ、ワークショップ全体を通して考えた事を述べさせていただきます。

まず、5つのワークショップそれぞれについて感想を述べさせていただきます。

ワークショップ1では、芹澤先生と長谷川先生からダイバーショナルセラピーのお話を聞きました。ダイバーショナルセラピーは、高齢者の方々により一層の「生きがい」や「幸福感」を感じてもらうためのセラピーです。芹澤先生のお話によると、高齢者の方が望んでいるものを提供するとき、その方の行動に随伴してそれを提供したほうが、行動に随伴せずに提供したときより、その方の「生きがい」感が高まるということでした。このワークショップを受けて、「生きがい」や「幸福」といった感情の定義や、その感情を引き起こすための環境設定について、行動分析学の視点からもう一度捉えなおす余地があると思いました。

ワークショップ2は、新宮市で実際に地域通貨の利用に取り組まれている品田先生と榎本先生から、地域通貨の実践例についてお話を伺いました。地域通貨はトークンと同じ機能であると考えられます。そうであるなら、地域通貨は広く利用されるはずですが、しかし、先生方のお話を伺う限り、地域通貨の使用は限定的で、利用者を広げるには多くの課題が残されていることが分かりました。企画座長の浅野先生からは、先生が愛知県のある地域のエコマネーに関与していたと聞いて、とても驚きました。

ワークショップ3では、企画座長の園山先生が紹介して下さった倉光先生と村本先生から、発達に障害のある方がご家族にいる場合の家族からの支援や問題についてお話を伺いました。発達に障害のある方への支援だけでなく、その家族への支援も必要であると思いました。

ワークショップ4は、藤井先生から徳島県のある地域での「ゼロ・ウェイスト運動について」

のお話を伺いました。座長は島宗先生でした。現在、核廃棄物の問題やごみ処理場の限界は、社会的な問題となっています。この問題を改善するため、社会的に様々な試みがなされており、その試みの一つがゼロ・ウェイスト運動です。この運動は、刺激性制御の考え方を応用して、ゴミ分別行動をより正確に、そして高頻度に行わせるというものでした。さらに、藤井先生が取り組んでおられる地域では、地元の人々とのコミュニケーションを促進させる場やエコ・ポイントという強化事態も設定されていました。その取り組みは、地域の人々の多様な行動を、同じ刺激で制御していることになるので、集団随伴性における刺激性制御の効果を改めて認識しました。

5つ目のワークショップは、「動物とともに生きる」というテーマのお話でした。島田先生からは、野生動物であるオジロワシの風力発電機に対するバードストライクの問題について、山本先生からは家庭犬の育成と訓練について、森山先生からは実験室で生きる実験動物の倫理についてのお話を伺いました。野生動物や家庭犬、さらに実験動物と関わる上で最も気を付けるべきことは、人が動物の行動を制御するときの倫理的配慮であると考えました。

以上、5つのワークショップの内容とそれに対しての私の感想を述べさせていただきました。全てに共通していた問題は、人間の社会における、人と人、人と動物の間の行動の制御の問題と、その方法についての検討であると思います。すなわち、ワークショップ1から4は、人による人の行動の制御、ワークショップ5は、人による動物の行動の制御と、動物による人の行動の制御が議論されていました。いずれもそれらの問題が、人間の社会的行動の問題として議論されていたと思います。

しかし、それらの社会的問題に行動分析学の知見がどのように活かされていくべきかについての議論はなかったように思います。2007年に佐藤先生が主張なさったように、人間の行動の

ほとんどは社会的行動であるとするなら、行動分析学からのアプローチは、社会的行動の随伴性、すなわち社会的随伴性の検討ということになるでしょう。従って、地域が抱える問題の検討には、社会的随伴性の枠組みで説明されるような取り組みが、今後必要となるのではないのでしょうか。これが、私が5つのワークショップを受けて思ったことのひとつであります。

これに関連して、思ったことが他にあります。それは、実験的行動分析学と応用行動分析学の関係についての問題です。行動分析学がプラグマティズムに依って立つ学問であるなら、行動分析家の視点は、どうしても応用に目が向いてしまうのではないのでしょうか。社会的随伴性を検討する場合にも、応用的な視点での検討が重視されがちとなり、基礎的な実験的な分析が行われにくいのではないかと危惧しました。実際、社会的な随伴性の中で実験室で求めるような条件を統制した研究を行うことは難しいでしょう。しかし、行動分析学は、実験的行動分析学と実践的な応用行動分析学がともに手をとりあうことによって、その存在価値がある学問だと私は考えております。従って、実験的行動分析学によって明らかにされた「行動の原理」を、社会的随伴性に応用するだけでなく、そこで起こった問題を実験室に持ち帰って、人や動物の社会的行動を分析するという基礎的な研究が必要であり、基礎と応用の相互循環的な望ましい関係

が構築される必要があると考えました。

この循環をよくするためには、実験的行動分析家と応用行動分析家が相互に協力し合う関係が必要と考えます。このような協力関係が、今回のワークショップで取り上げられた社会的問題を解決するには必要であると考えました。今後も基礎と応用の多くの研究者が協力し合うことを期待します。

最後に、本集會に参加することによって、行動分析学と地域社会、さらには行動分析学と日本の社会の関係について、その未来像を描くことができました。その未来像とは、実社会の中で生きる人々が行動随伴性という枠組みで自分たちの社会を捉え、それによって自分たちを含めた、生きとし生けるもののQOLを高めているような未来像です。そのような社会で行動分析家がプロフェッショナルとして活躍する社会、それが Skinner が夢見た社会であると考えました。

以上、稚拙な文章ながら、熊野集會に参加した感想を、参加した学生の代表として述べさせていただきます。この度、集會参加の機会を与えて下さった園山理事長、杉山先生、奥田先生、他学会関係の先生方、新宮市の関係者の方々に感謝申し上げます。

認知症研修会報告「高めよう！認知症の生活スキル： 行動リハビリテーションを活用する」

2013年2月9日（土）

田代大貴（初富保健病院 リハビリテーション科 理学療法士）

現代の日本の認知症の患者数は約 242 万人といわれており、高齢化社会の進展と共に今後も増え続けるとみられています。実際にリハビリテーションの場面でも認知症を合併する患者は増えており、介入の難しさを感じている医療関係者の方も多いのではないのでしょうか。

「認知症があるから何度注意しても間違う」、「認知症があるから覚えさせることは無理」と考えてしまうこともあるかもしれません。理学療法士として介入の方法に難渋している最中、認知症研修会へ参加する機会を頂きました。研修会は、三菱財団の社会福祉研究助成を受けて、参加費無料で実施されていました。当日の研修会内容をご紹介します。

認知症研修会は、『高めよう！認知症の生活スキル～行動リハビリテーションを活用する～』というテーマで東京会場の臨床福祉専門学校で開催されました。また、インターネットによる双方向通信で北海道会場の日本福祉リハビリテーション学院でも同時開催されました。研修会には、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士など両会場を合わせて 25 名の多職種の医療関係者が参加されていました。

講演 1『応用行動分析学の基礎』大森圭貢氏（聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院）

訓練中や生活場面で拒否が強いと、関わりが希薄になったり、逆に半強制的な誘導になってしまったりと、介入の継続が困難になるばかりか、患者様ご本人の拒否を助長してしまうこともあります。このような場合、ご本人のやる気がないから仕方がないという結論の元、介入をあきらめてしまうことがあります。

講演の冒頭は「拒否があることで介入が難しくなることは症例の意欲だけの問題か」という核心を突く問題提起がありました。私は、意欲の低下につながる疾患や合併症の存在とともに、意欲は行動の原動力であると考えていました。しかし、応用行動分析学の視点では、1) 行動は環境からの刺激によって変化することや、2) 意欲を変化させるのではなく、行動を変えていく

という視点から介入をとらえていくことが重要だと知りました。行動の先行刺激・後続刺激を整備することで、期待する結果を得る方法の概論を学び、研究データを踏まえた詳細な説明がありました。

講演 2『認知症患者に対する行動リハビリテーション』山崎裕司氏（高知リハビリテーション学院理学療法学科）

認知症患者は記憶の低下が著しく、誤った動作を修正できないことが多くあります。これに対し、繰り返して注意するという対応が一般的です。また、動作学習の場面では失敗体験を繰り返していることもあります。認知症患者に対する動作訓練は、時間を費やす割には定着せず、治療者にとっても失敗体験を繰り返してしまうこととなります。これらの方法は反発感情を生みやすく、効果的ではないことを講演で学びました。動作学習を促進するためには、無誤学習過程を準備する必要があり、様々な技法を用いた実際の研究データと共に、認知症患者に対する応用行動分析学を踏まえた具体的な介入方法の効果についての説明がありました。

講演 3『事例からみた認知症患者に対する介入効果』加藤宗規氏（了徳寺大学健康科学部）

重度の認知症患者への動作学習は困難で、生活場面で転倒や転落、介護負担などの問題提起があっても、動作や行動への問題解決に至らないことはよく経験します。今回は軽度～重度の認知症患者 4 例に対して、文字教示や口頭指示での手がかり刺激をより効果的に用いた介入により、動作の獲得に至ったという紹介がありました。また、リハビリだけではなく、生活場面で他職種間が統一した介入をするためのアプローチの重要性を学びました。重度の認知症患者への応用行動分析学を踏まえた介入に期待を持っています。

全ての講演後にパネルディスカッション『臨床現場での疑問について考える』がありました。トイレで排泄した直後に、排泄の訴えが再びある認知症患者についての対応など日常の臨床現

場で多くのセラピストが共通して抱えている疑問や行動リハビリテーションの活用方法に関する質問に対して、ご講演の先生方に回答や解説を頂きました。また、グループワークでは事例3つに対して、グループ別に応用行動分析学を踏まえたアプローチについて検討しました。東京会場と北海道会場のインターネットによる双方向通信で積極的な意見交換をすることができました。

最後に、新潟医療福祉大学医療技術学部の鈴木誠氏による『高齢アルツハイマー病患者に対

する支援プログラムの構築』の概要に関する説明がありました。認知症患者に対するリハビリの効果を明確にするのと同時に、適切な介入方法を確立していくことが重要だと感じました。

今回、我々の介入方法次第で行動は変わるということを知ることができたと同時に、今まで悩んでいた認知症患者への介入の糸口を見つけることができたと感じています。応用行動分析学を元に、患者様のできることを増やしていける関わりが明日から実践できるようにしたいと思います。

<連載：いま、こんな研究会しています（6）>

第一回高知言語教育ABA研究会を開催して

森下浩充（須崎くろしお病院）

潮風に乗って聞こえる海のさざ波と、鯉の薫焼きタタキの香ばしい香りが立ちこめる高知県の須崎市で、1月11日に第一回高知言語教育ABA研究会を須崎くろしお病院にて開催させていただきましたのでご報告させていただきます。

高知言語教育ABA研究会は、県下の療育、保育、教育、リハビリテーションの中で、応用行動分析の知識を習得し、活用できる人が一人でも多く増えていただきたいという思いから発足されました。研究会の顧問には国際的に活躍されている、山本淳一先生（慶應義塾大学文学部（心理学専攻）教授）になっていただきました。第一回目の研究会ではDr、PT、OT、ST、教諭などの多種の領域の先生方にご参加いただきました。ABAを用いた言語聴覚療法についての単一事例研究や、山本先生と会場とで活発なディスカッションなどがおこなわれたのでご報告させていただきます。

まず、ABAの概論と研究会の発足の経緯につ

いて森下浩充（須崎くろしお病院）からご説明をさせていただきました。その中では、他者と交互的に遊ぶことを拒否していた自閉症のお子さんに対してPRT（Pivotal Response Teaching）を用い、段階的な介入の結果、1つの玩具を2人で楽しみながら遊ぶまでの映像提示させていただき、会場からは「ABAを用いるとあんなにコミュニケーションが取れるようになるんだね」という嬉しいお言葉をいただきました。

次に、重度自閉症児に対するABAを用いた言語聴覚療法について野田佑佑先生（須崎くろしお病院）からご発表がありました。持続して着席することが難しく、事物の機能的操作が困難な自閉症児に対してDTT（Discrete Trial Teaching）を用いることで短時間に速いテンポで連続した強化刺激が与えられ、次々と事物の機能的な操作が獲得されていく映像にはABAの効果が揺ぎ無いものであると改めて感じました。

そして、当研究会の最大の醍醐味である慶応

義塾大学の山本研究室の先生方と Skype（インターネットテレビ電話）を用いてパネルディスカッションがおこなわれました。来場された先生方から事前に集めさせていただいた臨床に対する疑問に対して山本先生が 1 時間という短い時間にも関わらず 8 つの疑問を次々と解決され、研究と臨床の場が一つになっていくさまに深い感動を感じました。問題行動や介入がうまくいかないことに共通しているのは、出来ないことばかりに目を向けていること。出来ることをどんどん増やしていくことで結果的に問題行動が減少し、効果的な介入がおこなえる。まさに山

本先生のいつもご講演でいわれている「“できる”を伸ばす」を短時間で理解できる素晴らしいディスカッションとなりました。

数多くのエビデンスを蓄積し続けている応用行動分析の手法が言語聴覚士を始め、まだまだ療育・教育機関のなかに ABA が定着していないのが現状です。新しい日本の夜明けを目指し、奮闘していった維新の志士達が多くいるこの高知だからこそ、高知言語 ABA 研究会は療育・教育・リハビリテーションの新しい夜明けを皆様と一緒に見られようように活動を続けていきたいと思ひます。

<自著を語る>

『DVD で学ぶ応用行動分析学入門』

有川宏幸（新潟大学）
渡部匡隆（横浜国立大学）

2013 年 3 月に「DVD で学ぶ応用行動分析学入門(中島映像教材出版)」を発売いたしました。

本 DVD はタイトルのとおり、応用行動分析学の入門編としてつくられたビデオ教材です。近年、応用行動分析学に基づくアプローチは、教育、医療、福祉、行政や企業といった幅広い分野において試みられ、発展しています。筆者の周辺でも応用行動分析学に興味を示す学生や、教員、福祉関係者が少しずつですが増えてきているように感じています。

そうした喜ばしい傾向がある一方で、筆者がよく耳にするのが「本を読んでみたのだが、専門用語が多くて、わからなくなってくる」という声です。筆者自身も、学生時代に初めて応用行動分析学を学んだ時には、普段、何気なく使っている身近な言葉(例えば『録画したドラマを「消去」した』)が、行動分析学においてはある

特定の行動の法則を説明した専門用語(例えば『「消去」の原理により行動が減少した』)であり、「わからなくなってくる」ことを幾度となく経験しました。初学者の声が意味するところも十分に理解できます。

本 DVD は、前半部分では、人の行動の理由を分析するための枠組みとして、「三項強化に伴性」に始まり、「正の強化」「負の強化」「正の弱化」「負の弱化」「消去の原理」「弁別の原理」、そして「行動の測定にもとづく分析の手順」について順次解説しています。分析の基本的考え方、専門用語等は、この前半部分で一通り理解できる内容になっています。

しかし、これだけでは生活の中で生じる様々な出来事を分析する視座は得にくいと考え、後半部分では、より身近にある日常の様子を分析の枠組みで捉えられるように、8 つのショート

ドラマを設定しました。それぞれのストーリーは、前半部の解説に対応しており、応用行動分析学に基づく分析の枠組みが、日常生活に適用できることを理解できるようになっています。



各ショートドラマの後にはその都度、ドラマ内のどこがポイントとなっているかを随時解説しています。

筆者も学部生向けの初回講義に、このDVDを視聴させてみましたが、反応は良いようです。視聴後、しばらくの間、行動分析学のいくつかの用語が学生達の日常会話に出てくるようになっていたので(このDVDが爆発的にヒットし、広く世間に知れ渡っていればもう少し維持していた?!)、当初の制作目的は達成されているのかなと思っております。

<連載：海外で学ぶ学生、海外で働く専門職（10）>

ABA セラピーのプログラムスーパーバイザー という仕事

小山高慶 (Maxim Healthcare Services)

アメリカでABAを専門に勉強した人のための仕事というと、どういったものが頭に浮かぶでしょうか。自閉症療育と関わりの深いABAを勉強をした人は、研究職についたり、臨床の仕事が主だと思います。臨床の仕事といっても、学校で雇われたり、大学の付属機関で働いたり、あるいはABAセラピーを提供する会社に勤めたりとさまざまな就職先があります。

私の場合、主に家庭訪問型のABAセラピーを提供する会社にて、Program Supervisorとして働いています。スーパーバイザーというのは、

クライアントごとにBehavior Plan（教育指導計画のようなもの）を作成し、子どもを直接指導するセラピストを監督するのが主な仕事です。私の働く会社は、Clinical Directorが1人、スーパーバイザーが5人程度、セラピストはほとんどがパートタイムですが40～50人くらいいます。クライアントの家庭にて行うABAセラピーは、たいていは子どもの学校が終わった2時半から7時くらいに集中するので、午前中は業務連絡、セラピー案の作成等を行い、午後クライアントの家から家へと移動することが

多いです。子どもは、たいていの場合、週3～5日、1日2時間～2時間半ほどのセラピーを受けます。直接子どもと関わるのはセラピストの仕事で、スーパーバイザーは指導計画が進んでいるか、問題はないかなどのチェックと、親との相談などのために毎週～隔週ほどの頻度で各家庭を訪問します。私は現在13人くらいのクライアントを担当していますが、年齢、発達段階、共に実にバラエティーに富んでいます。言葉が全くなく、シンボルの認知もままならず、自傷行為が主なコミュニケーション手段という子どもから、ソーシャルスキルに遅れが見られるアスペルガーの青年まで、様々なクライアントと接するスキルが必要になります。

スーパーバイザーという仕事は、実に自由度が高く、いろいろな子どもと接するので大変やりがいがあります。また、子どもが自分の作成した指導計画通りに、新しいスキルと学んだり、問題行動が減ったりするのを見れることも喜ばしいことです。逆に、この仕事の一番難しい点は何かと聞かれたら、たいていのスーパーバイザーはクライアントの親への対応だと答えるのではないのでしょうか。多様性の国アメリカには、実に様々な家庭の形があります。もちろん見習いたい家庭もありますが、子どもとほとんど関わろうとしない親、不衛生な家、学校の先生に恐れられているモンスターペアレント、私の目の前で子どもに殴りかかろうとする親、と今まで数々のびっくりする場面に出くわしてきました。州の補助のもとに行われているABAセラピーも担当しているので、問題のある家庭に遭遇することが多くなるのだと思います。家庭のプライバシーに踏む込むことが多くなるこの仕事は、そういった状況を楽しめる能力が必要なのかもしれません。

アメリカでは、州によって、また保険会社ごとに、健康保険の保障内容が大きく異なります。カリフォルニア州などではABAセラピーが保険会社、あるいは州政府によって保証されますが、私が働くワシントン州ではABAセラピーを保証

する保険会社はごく一部に限られています。BCBAやABAセラピストが学校で働くのも稀です。ABAセラピーというと、少数のラッキーな家族のみが受けられるサービスです。私がここで紹介した仕事内容はワシントン州の状況についてであり、他の州ではまた状況が異なるということも覚えておいていただきたいです。

もともと日本の大学で心理学を勉強していた私が、行動分析の分野に足を踏み入れたのは、大学4年の時に留学先のノースカロライナ州で見つけたサマーキャンプカウンセラーの仕事がきっかけでした。このサマーキャンプは自閉症児・者専用のキャンプで、自閉症児・者が楽しくキャンプ生活を送れるように世話をするのがカウンセラーの役割でした。当時自閉症という言葉も知らなかった私は、何か臨床の仕事がしたかったので、この仕事に応募することにしましたが、この仕事がその後の進路を変えることになるとは想像もしていませんでした。サマーキャンプでは、カウンセラーとして1週間ごとに変わる1～2人の自閉症児・者を担当しました。ある週に私が担当した16歳くらいの重度の自閉症の男の子が、私の進路の転機になりました。この男の子は言葉はできませんし、強度の強迫行動がありましたが、プールがとても好きでした。ところがプールが好きなあまりに、初めてのプールの時間が終わったときにパニックをおこし、プールサイドのコンクリートに頭をぶつけ始めたのです。体重が100キロ以上あるとても大きい男の子だったので、自傷行為を止めるのに大人4人が必要でした。けれど、問題行動の対処について何も知らない私は、その場はだまって見てることしかできませんでした。その事件の後困ったのは、その男の子をどうやってプールからあがらせるかということです。サマーキャンプでは1日3回プールの時間がありましたから、その度にパニックを起こされていたのではなかったものではありません。考えた結果、私がとった対策は、プールの時間が終わる10分前、5分前、3分前、1分前ごとに、もうすぐプール

の時間が終わるよという言葉かけ(Warning)をしていくことでした。この対策は思った以上に効果があり、男の子はパニックを起さずにプールからあがることができるようになりました。自分で考えた対処法が目前で結果になって返ってくる。おそらくこの時に、自閉症療育の面白さを知ったのだと思います。

留学を終え日本に帰った私は、アメリカでもっと勉強したい、特別支援教育についてもっと知りたいといった思いから、アメリカの大学院へ進学するべく GRE を受け、大学院の願書を出しました。幸い、ワシントン大学の特別支援教育学科障害幼児教育専攻に合格することができ、2002年9月に日本を立ちました。

日本で自閉症療育関係の仕事というと、学校カウンセラーなどの心理系の仕事が多くなるのではないのでしょうか。Board Certified Behavior

Analyst (BCBA) という肩書きがそのまま仕事につながる状況はまだ少ないというのが私の認識です。そんな中、日本で ABA を学び、実践する方々は、ABA の認知度を高めるため、療育での活躍の場を広げるために奮闘されていると思います。私は興味から赴くままに、専攻を何度か変え、アメリカの大学院で学び、今の仕事に就くことができました。自閉症児に関わる仕事がしたいと、ノースカロライナ州のサマーキャンプで思ってから、早 11 年が経とうとしています。その進路は最初から見えていたわけではなく、いろいろな出会いがあり、機会があって自然と今の状況に落ち着いたという感じです。今の仕事が自分に一番あっているものなのか、これからどれくらい続けていくのかわかりませんが、今は楽しくやりがいのある仕事ができていると思っています。

<連載: jABAシアター>

映画「クラッシュ」と映画「危険なメソッド」: 現代人の欲望の行方

伊藤正人 (大阪市立大学)

「俺は事故車を運転するのが夢なんだ。アルベール・カミュのヴェガ (仏の高級車)、グレース・ケリーのローヴァー (英国の高級車)……。自動車事故は、破壊的ではなく、生産的出来事だ。つまり性的エネルギーの解放だからだ。実際に起きた事故を再現することで、その性的エネルギーを体験することが俺の目的だ」。有名人の起こした自動車事故を再現するショーを企画する男ヴォーンが主人公のジェームスに語る。

デビット・クローネンバーグ監督作品の映画

「クラッシュ」(1996年制作、カンヌ国際映画祭審査員特別賞受賞)は、機械文明が高度に発達した現代社会に生きる人々の欲望に光を当てた問題作である。現代の機械文明の象徴は、自動車や飛行機である。欲望の対象は、これらに向かう。また、これらの機械を操ることには、事故や怪我がつきものである。事故や怪我もまた欲望の対象になるというのである。欲望といっても、性的欲望の対象としてのものである。

映画は、格納庫の自家用飛行機の機体に乳房を押しつけ、金属の冷たい感触に恍惚の表情を

浮かべる妻のキャサリン（デボラ・アンガー）の姿から始まる。夫の映画プロデューサー、ジェームス（ジェームス・スペイダー）とは、他の男との性行為をあからさまに語り合う関係である。高層住宅の自宅バルコニーで、互いの性行為を語り合う二人の眼下には、おびただしい数の車が走行している広大な高速道路（ハイウェイ）が見えている。この映画の主題を暗示しているかのようなのである。

ジェームスは、仕事帰りに不注意から、衝突事故を起こし、運転していた相手は死亡してしまう。ジェームスも重傷を負い、入院するが、そこでやはり負傷して入院していた、死亡した相手の妻ヘレンと、自動車事故や事故の後遺症に異常な関心を抱く男ヴォーンと知り合う。ジェームス・ディーンのポルシェ 550 による自動車事故の再現ショーを、ヘレンに誘われて見に行ったジェームスは、再びヴォーンとその仲間たちに出会う。ジェームスは、彼らの嗜好を理解できないといいつつも、次のショー（ジェーン・マンスフィールドの自動車事故死の再現）の準備に手を貸してほしいというヴォーンの熱い視線に引き寄せられていく。妻キャサリンもまたジェームス同様、ヴォーンの妖しい雰囲気惹かれていく。やがてジェームス夫妻とヴォーンの3人が車で走行中、偶然にも、交通事故の現場に遭遇、ヴォーンは、またとない機会とばかりに写真を撮りまくるのであったが、気がつくやうに、事故を起こしたのは、ジェーン・マンスフィールドに扮した仲間のスタントマンであった。ジェームスとキャサリンは、事故現場の騒然とした雰囲気に陶酔感さえ覚えるようになっていた。

その後、ヴォーンは、ジェームス夫妻の車とのカーチェイスの果て、道路からの転落事故を起こし亡くなってしまふ。ヴォーン亡き後、ヴォーンの霊が乗り移ったかのように、今度はジェームスが、キャサリンの車を追尾し、キャサリンの車を横転させてしまふが、ラジエーターから白煙を上げる車に駆け寄ったジェームスは、

負傷したキャサリンに「この次はきっと・・・」と、カタルシス（死）を暗示する言葉を掛けるところで映画は終わる。

以前に映画「羊たちの沈黙」を取り上げ、「羊たちの沈黙：内なるものは外にあり」（ニューズレター1997年夏号）と題して、この映画に描かれた FBI 訓練生クラリス（ジョディ・フォスター）による犯人逮捕への手がかりが、動機づけの問題に関係していることを指摘した。「犯人の欲望は、毎日見ているものをほしがることから始まる」という殺人鬼のレクター博士（アンソニー・ホプキンス）により与えられたヒントから、クラリスは、犯人が最初の被害者（最初に発見された被害者ではなく）のそばに居住していたことに気づき、犯人逮捕につながるのである。このように、この映画では、猟奇的殺人犯の行動の原因が、皮膚の内側にある何ものかではなく、皮膚の外側にあることをきわめて明快に描いていた。副題に「内なるものは外にあり」（この言葉は、ゲーテの「晩年の詩」に出てくるものであるが、ゲーテも同じような動機づけの考え方であったといえる）としたのは、このような動機づけの考え方を表すためであった。

今回取り上げた映画「クラッシュ」で描かれた現代人の欲望も、映画「羊たちの沈黙」で描かれたように、毎日見ているもの（膨大な数の自動車）へ向けられることを表している。そして、ヴォーンのいう性的エネルギーの開放が、やがてカタルシス（死）へ向かうことを暗示させる最後の場面は、フロイトの思想を思い起こさせ、クローネンバーグ監督のフロイト思想への関心の高さを示していると考えられる。こうした関心が、精神分析学創生期のフロイトとユングの史実を描いた映画「危険なメソッド」（2011年制作）につながったといえよう。この映画で、クローネンバーグ監督は、フロイトとユング、そしてユングが精神分析の方法を適用した最初の患者であり、愛人でもあり、後に精神分析家となったロシア人女性、ザビーナ・シュピールライン（リッヒェベッヒャー「ザビー

ナ・シュピールラインの悲劇」岩波書店)との交流を実に丁寧に描いている。精神分析学を科学にしようとするフロイトに対し、ユングは、科学というよりは宗教的世界(神秘主義)へ向かい、患者と治療者という関係を越えたザビーナとの情交と別れ、そしてフロイトとの決別により精神を病むという、フロイトとは対照的な生き方をしていくことになる。ここでは、性的エネルギーは、もっぱら他者へ向けられるもの

として描かれ、映画「クラッシュ」で描いた現代人の性的欲望との対比が鮮やかである。映画は、特段のカタルシスもなく終わるのであるが、ユングの妻が精神を病んだユングの治療をかつての愛人ザビーナに依頼する最後の場面は、「危険なメソッド」という題名に込められたクローネンバーグ監督の精神分析学への批判的意味の一つを表すものなのかもしれない。

編集後記

現在のJ-ABAニュース編集体制になって2年目に入りました。その第1号である今号は、本学会三十年記念事業特集号とも言える内容となっております。河合伊六先生にお声をかけていただいて、はじめて私が行動分析学会に参加したのが、1988年6月に開かれた第6回大会(愛知大学)でした。会の発足後すでに5年が経過し

ていたことになりましたが、コンパクトな学会という印象でした。あれから25年、J-ABAは大きく成長したとあらためて感じます。熊野集会は成功裡に閉幕し、来月にはいよいよ三十年記念事業のクライマックス、記念式典と記念シンポジウムが名古屋で挙行されます。

(HO)

J-ABA ニュース編集部よりお願い

- ニュースレターに掲載する様々な記事を、会員の皆様から募集しています。書評、研究室紹介、施設・組織紹介、用語についての意見、求人情報、イベントや企画の案内、ギャクやジョーク、その他まじめな討論など、行動分析学研究にはもったいなくて載せられない記事を期待します。原稿はテキストファイル形式で電子メールの添付ファイルにて、下記のニュースレター編集部宛にお送りください。掲載の可否については、編集部において決定します。
- ニュースレターに掲載された記事の著作権は、日本行動分析学会に帰属し、日本

行動分析学会ウェブサイトで公開します。

- 記事を投稿される場合は、公開を前提に、個人情報等の取扱に、十分ご注意ください。

〒582-8582 大阪府柏原市旭が丘4-698-1
大阪教育大学 大河内研究室気付
日本行動分析学会ニュースレター編集部
大河内浩人

E-mail: okouchi@cc.osaka-kyoiku.ac.jp